

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：33908

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12354

研究課題名（和文）カリブ海諸島及び朝鮮半島における（旧）植民者の文学に関する比較越境的研究

研究課題名（英文）A Comparative Analysis of Boundary-Crossing Literature Written by Colonisers in the Caribbean and on the Korean Peninsula

研究代表者

杉浦 清文 (Sugiura, Kiyofumi)

中京大学・国際学部・准教授

研究者番号：40645751

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語圏カリブ海諸島出身の（旧）植民者によって書かれた文学と朝鮮半島出身の（旧）植民者によって書かれた文学を比較越境的に検証した。その際、「白人クレオール」（新大陸で生まれた育ったヨーロッパ人／白人を意味する）の作家ジーン・リース、フィリス・シャンド・オルフリー、ローレンス・スコットと日本統治時代の朝鮮半島で生まれ育ち、敗戦後、日本に引揚げてきた作家である森崎和江、小林勝、村松武司、五木寛之に着目した。その結果、そうした作家たちが、（旧）植民者の立場から自己省的に、また時には自己批判的に植民地主義の過去・遺産を繰り返し想起しようとしている点が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究における成果の学術的意義および社会的意義は、主に以下二点である。これまで包括的かつ体系的に研究されてこなかった、「白人クレオール」（ジーン・リース、フィリス・シャンド・オルフリー、ローレンス・スコット）と朝鮮半島からの「引揚者」（森崎和江、小林勝、村松武司、五木寛之）の文学を新しい比較文学的アプローチ（「越境的＝横領的読み」の実践）を用いて考察した点。また、そうした比較文学研究を通して、植民地主義の過去・遺産を地球規模の視点で批判的に再考した点。

研究成果の概要（英文）：This research engaged in a comparative analysis of boundary-crossing literature written by colonisers in the Anglophone Caribbean and on the Korean peninsula. In so doing, this comparative literary research took particular note of white West Indian/Creole authors Jean Rhys, Phyllis Shand Allfrey and Lawrence Scott; and Japanese authors Kazue Morisaki, Masaru Kobayashi, Takeshi Muramatsu and Hiroyuki Itsuki, who were born and raised in Korea during the Japanese occupation and later evacuated after Japan's defeat in World War II. Ultimately, this research shed light on the fact that these authors repeatedly attempt to self-reflectively but at times self-critically remember colonial pasts or legacies from the position of a coloniser.

研究分野：英語圏文学、比較文学

キーワード：植民地主義 朝鮮半島 引揚者 カリブ海地域 白人クレオール

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景は、以下、三点にまとめることができる。

(1) 英語圏カリブ海諸島出身「白人クレオール」(新大陸で生まれ育ったヨーロッパ人/白人を意味する)の文学研究

当時の「白人クレオール」に関する文学研究においては、(旧)英領ドミニカ島出身の女性作家ジーン・リース(Jean Rhys)だけが主な研究対象とされる傾向にあった。その背景として、ポストコロニアル文学研究の発展経緯の影響が大きいと考えられる。とりわけ、その研究を中心となって今も牽引し続けるガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク(Gayatri Chakravorty Spivak)が、1985年に発表した論文「3人の女性によるテキストと帝国主義批判」(“Three Women's Texts and a Critique of Imperialism” in *Critical Inquiry*, Volume 12, Number 1 Autumn, 1985)において、リースの代表的作品『サルガッソーの広い海』(*Wide Sargasso Sea*)に着目し、そこで「白人クレオール」の主体性の問題を取り上げた。以後、スピヴァクのその論文への応答として様々な議論が生み出され続けてきた。

また、1990年代になると、エレイン・セイボリー(Elaine Savory)が積極的にリース文学の体系化を試みていくことになる。しかし、英語圏カリブ海諸島出身の「白人クレオール」作家はリースの他にも存在する。たとえば、リースとほぼ同世代で同郷の「白人クレオール」女性作家フィリス・シャンド・オルフリー(Phyllis Shand Allfrey)や、さらにはトリニダード・トバゴ出身の「白人クレオール」男性作家ローレンス・スコット(Lawrence Scott)もいる。だが、研究開始当初において、調べた限り、オルフリーに関する主な研究書は、リザベス・パラヴィジニ・ジェバート(Lizabeth Paravisini-Gebert)による一冊だけであったし、スコットの研究書となると一冊もなかった。したがって、本研究を開始する際、特にジーン・リース、フィリス・シャンド・オルフリー、ローレンス・スコットの三人の「白人クレオール」作家に着目しようとした。

(2) 朝鮮半島からの「日本人引揚者」の文学研究

1971年に尾崎秀樹が『旧植民地文学の研究』を出版し、「日本人引揚者」の文学に注目した。しかし、その後、「引揚者」個人の体験談集等は地道にまとめられてきたものの、「引揚者」の文学が単独で研究されることは極めて少なかった。だが、戦後70年を迎えようとしていた中、2009年、韓国の研究者朴裕河が雑誌『日本学報』において「引揚げ文学論序説 戦後文学の忘れもの」(『日本学報』第81輯(2009年11月))を発表し、2012年には日本比較文学学会第74回全国大会において、「比較植民地文学の射程 「引揚者」の文学を開く」と題されたシンポジウムが開催され、「引揚者」の文学が再び研究対象とされることになった。ちなみに、そのシンポジウムでは、西成彦の司会の下、杉浦清文、朴裕河、中村和恵、原佑介が報告を行った(杉浦、朴、原の発表原稿は大幅な加筆修正が施され、立命館言語文化研究24巻4号(2013年3月)に掲載されている)。そして、2016年には朴裕河が単著『引揚げ文学論序説: 新たなポストコロニアルへ』(人文書院、2016年)を出版し、そこで引揚げ文学の全容を明らかにした。しかしながら、それぞれの作家や作品の詳細な研究はさらに発展させていく必要があった。したがって、当初、本研究では、特に朝鮮半島からの「引揚者」である森崎和江と小林勝の二人の作家を研究対象とすることにした。

(3) 新たな比較文学研究 「越境的=横領的読み」

西成彦は論文「日本語文学の越境的な読みに向けて」(立命館言語文化研究22巻4号(2013年1月))において、比較文学研究における「越境的な読み」の可能性を指摘している。また、そこで、西がその「越境的な読み」を「横領的な読み」と言い換えている点は興味深い。いずれにしても、西の次の言葉は、本研究における新しい比較文学的アプローチの構築において極めて重要であった。「戦後引揚者や「旧植民地」系の在日外国人の文学を考えると、ヨーロッパ文学に見られる近似的な例を念頭に置くことは有益だろう。そうすることで、西洋諸列強の「外地文学」を「外地の日本語文学」として横領的に読むという夢のような可能性が拓けてくる」(184頁)。本研究を効率的に行うためには、研究開始当初から、交叉的な読み、または「越境的=横領的読み」の実践に基づいて、比較文学研究の新たな可能性を探究する必要があった。

2. 研究の目的

以上の学術的背景を踏まえ、本研究の目的は、英語圏カリブ海諸島出身の「白人クレオール」の文学と朝鮮半島からの「日本人引揚者」の文学を「(旧)植民地で生まれ育った植民者」という観点から比較越境的に検証することであった。

3. 研究の方法

研究の方法は、以下、三点にまとめることができる。

(1) 英語圏カリブ海諸島出身の「白人クレオール」の文学に関する研究方法

「(旧)植民地で生まれ育った植民者」という観点から、ジーン・リース、フィリス・シャンド・オルフリー、ローレンス・スコットの文学作品を丁寧かつ慎重に読むことによって、それぞれの作家がイギリス(人)やカリブ海諸島(人)に抱く複雑な心境を比較考察した。

(2) 朝鮮半島からの「日本人引揚者」の文学に関する研究方法

「(旧)植民地で生まれ育った植民者」という視点から、朝鮮半島からの「日本人引揚者」(森崎和江、小林勝、村松武司、五木寛之)の文学作品を丁寧かつ慎重に読むことによって、それぞれの作家が日本(人)や朝鮮(人)に抱く複雑な心境を比較考察した。

(3) 英語圏カリブ海諸島出身の「白人クレオール」の文学研究と朝鮮半島からの「日本人引揚者」の文学を比較考察する際に用いた研究方法

英語圏カリブ海諸島出身の「白人クレオール」の文学研究と朝鮮半島からの「日本人引揚者」の文学研究を比較考察する際、一国文学史観を前提とした伝統的な比較文学研究の方法を用いずに、西の提唱するような「越境的=横領的読み」の実践に根差した比較文学的研究方法に依拠した。

4. 研究成果

本研究は、開始当初、三年間の研究期間を予定していた。しかしながら、予想外の新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延により、研究期間を三年間延長することとなった(研究期間:2018年度~2023年度まで)。また、同じ理由により、2020年度以降に予定していた韓国、イギリス、カリブ海地域への現地調査は、感染予防のために見送ることとなった。こうした想定外の状況の中で、当初考えていた程、十分納得のできる研究を推し進めることができなかったことは極めて残念である。しかしながら、以下、大きく分類して三点の研究成果を挙げることができたことは、今後の英語圏文学研究、日本語圏文学研究、さらには比較文学研究の発展に大きな貢献を果たしたと考えている。

(1) 英語圏カリブ海諸国出身「白人クレオール」の文学研究に関する成果

英語圏カリブ海諸国出身の「白人クレオール」の文学作品に着目し、「(旧)植民地で生まれ育った植民者」の立場を検証した。その結果、以下二点の研究成果が得られた。

ジーン・リース、フィリス・シャンド・オルフリー、ローレンス・スコットの研究については、2019年度、イギリスで一年間在外研究を行い、リーズ大学英文学研究科において、ジョン・マッククラウド教授の指導の下で推し進めることができた。また、在外研究中、イギリスのマンチェスター大学で2019年9月11日から13日まで開催されたポストコロニアル研究学会(Postcolonial Studies Association)の大会に参加し、世界で著名な「ポストコロニアル」文学研究者の講演及び研究発表を聴講した。さらに同じく在外研究中において、リーズ大学の図書館において、日本では入手困難である、「白人クレオール」作家及び「ポストコロニアル」文学全般に関する資料収集・整理を行うとともに、大英図書館に通う中で(2020年1月27/28/29日、2月26/27/28/29日、3月6/7日、3月10/11/12/13日)「白人クレオール」作家及び「ポストコロニアル」文学全般の貴重な資料を収集・整理した。(旧)植民者としての自身の立場を直接的にも間接的にも自己省察していく姿は、三人の作家に共通しているといえる。やや遅れ気味であるが、後に、これらの資料を基に、論文を書き上げる予定である。なお、ジーン・リース研究に関しては、2021年10月16日に開催された日本英文学会第73回中部支部大会シンポジウム「旅」をめぐりイギリス小説「空間と語りの変遷」において、「故郷喪失者との対話 Jean Rhys による 1936年の帰郷をめぐって」と題する発表を行い、カリブ海諸国における、その当時の人種にまつわる政治状況を考慮に入れながら、「植民者」としての立場にあるリースの帰郷の様子と彼女のその時の心境を検証した。

ジーン・リース研究からエドウィージ・ダンティカ研究への発展

「複雑な故郷観」という観点からジーン・リースの研究を進めていく中で、ハイチ系アメリカ人作家エドウィージ・ダンティカ(Edwidge Danticat)の研究へと接続することができた。リースの文学作品とダンティカの文学作品を「越境的=横領的」に読む中で、ハイチ系アメリカ人作家ダンティカと「白人クレオール」作家リースの複雑な故郷観やアイデンティティの様相をより深く検証できた。具体的には、2018年4月28日に青山学院大学で開催された黒人研究学会例会での研究発表「移民芸術家 Edwidge Danticat にとっての「英語」使用」、2021年6月27日にオンラインで行われた黒人研究学会第67回全国大会シンポジウムでの研究発表「Wide Sargasso Sea を読むこと ハイチ系アメリカ作家 Edwidge Danticat の場合」、2021年10月3日にオンラインで開催された日本アメリカ文学会第60回全国大会シンポジウムにおける研究発表「恐れずに創作すること/書くこと <移民芸術家> Edwidge Danticat の *The Dew Breaker* を読む」、2023年3月3日に行った立命館大学ヴァナキュラー文化研究会における特別講演「ゾラ・ニール・ハーストンとエドウィージ・ダンティカにとってのゾンビ」、さらには、2024年3月16日に中京大学で行った国際シンポジウムでの研究発表「Danticat Reading Jean Rhys: A Consideration of In-Betweenness and Creativity in the Work of Haitian-American Author Edwidge Danticat」において、リース研究とダンティカ研究との有機的な結合を試みた。今後の課題は、今回の研究で得た成果を活かして、リースとダンティカの文学に関する「越境的=横領的読み」を通じた比較考察をさらに推し進めることである。

(2) 「日本人引揚者」の文学研究に関する成果

「(旧)植民地で生まれ育った植民者」の観点から「日本人引揚者」の文学作品を検証し、以下二点の研究成果を得た。

森崎和江の文学作品に関しては、これまであまり研究されてこなかった彼女の詩作を検証し、2021年度、『立命館言語文化研究』33巻1号(2021年7月)において、「植民者二世と朝鮮

森崎和江の詩におけるダイアローグ、そして共振について」と題された論文を発表した。この論文は、後に大幅な加筆修正が行われ、中川成美・西成彦編者の著書『旅する日本語 方法としての外地巡礼』（松籟社、2022年）の中にも同じタイトルで掲載された。本論文では、植民者二世であった森崎の「罪の意識」から生じる、複雑な故郷観に着目しつつ、森崎の詩、とりわけ「哀号」、「海」、二篇の「空」と題された詩、そして「千年の草っ原」を研究対象とした。なお、この論文においては、小林勝、また同じく朝鮮半島からの引揚者である村松武司、五木寛之に関する故郷観にも着目した。森崎、小林、村松、五木の複雑な故郷観を比較考察する中で、朝鮮半島からの「日本人引揚者」の文学研究に新たな視点を提供できたと確信している。

また、本研究を推し進める中で、朝鮮半島からの「日本人引揚者」の文学から、満洲からの「日本人引揚者」の文学、さらにはインド、東欧における（旧）支配者の文学へと研究対象を拡張できたことは大きな成果であった。具体的には、2018年12月8日、日本比較文学会中部支部大会（於中京大学）において、「帝国崩壊と本国帰還 イギリス、ドイツ、日本における（旧）支配者たち〈語り〉」というタイトルのシンポジウムを開催し、そこでイギリス文学の研究者、ドイツ文学の研究者、日本思想の研究者と共に、地球規模の視点から（旧）支配者から生み出された文学について議論できた。そのシンポジウムでは、杉浦がコーディネーター・企画・運営・研究発表を担当し、大阪大学の伊勢芳夫、中京大学の林久博、同じく中京大学の樹本健も研究発表を行った。ちなみに、そのシンポジウムで、杉浦は「少年時代の断片化された記憶 三木卓と『ほろびた国の旅』」と題する研究発表を行い、朝鮮半島で育った森崎の複雑な故郷観と満洲で育った三木の故郷観とを比較考察した。なお、シンポジウム全体の議論を通じて、朝鮮半島と満洲の（旧）支配者の文学（森崎和江、三木卓、阿部公房の文学作品）、インドにおける（旧）支配者の文学（特にポール・スコット（Paul Scott）の文学作品）、東欧にまつわる（旧）支配者の文学（特にギュンター・グラス（Günter Grass）の文学作品）を交叉的、ひいては「越境的＝横領的」に読む中で、新しい比較文学研究の萌芽を感じることができた。このシンポジウムで行った研究発表の原稿は、大幅な加筆修正を行い、伊勢芳夫編『近代化』の反復と多様性 「東と西」の知の考古学的解体』（溪水社、2021年）において、「少年時代の断片化された記憶、そして〈原体験〉 三木卓の『ほろびた国の旅』を読む」とタイトルを変えて掲載した。ここでは、大人になってから、ある意味、遅れて表出してきた三木による「植民者」としての自己意識にも着目した。

（3）新たな比較文学的アプローチ／「越境的＝横領的読み」

以上の研究を通じて、新たな比較文学研究、つまりは「越境的＝横領的読み」に基づいた比較文学研究の重要性を実感した。以下二点は、「越境的＝横領的読み」を通じた新たな比較文学的アプローチから得られた研究成果である。

「（旧）植民地で生まれ育った植民者」という観点から、「白人クレオール」と「日本人引揚者」の文学を「越境的＝横領的」に「読む」ことによって、リース、オルフリー、スコット、そして森崎、小林、村松、五木の文学に見られる、次のような共通点が明らかとなった。こうした作家たちの、植民地で過ごした幼年期の記憶はそれぞれの作品の中に深く浸透しているが、しかし、彼／彼女たちは、そうした記憶を単に古き良き時代の郷愁として表現しようとはしない。そうした作家たちにとって、幼年期の記憶を呼び起こすことは、（旧）植民者であるという自分自身の立場を繰り返し（中には反復強迫的に）意識することへと繋がっているように感じられる。

「越境的＝横領的読み」／新たな比較文学研究のアプローチに関しては、『植民地文化研究』第19号（2020年7月）に掲載された「植民地文化研究の最前線に触れる（第1回）「外国文学者の自国帰帰をめぐる：英語圏文学者・比較文学者の杉浦清文さんに聞く」において、まさに「越境的＝横領的読み」を提唱する西成彦と往復書簡の形をとった対話を通じて議論を深めた。またその際、当該研究（「カリブ海諸島及び朝鮮半島における（旧）植民者の文学に関する比較越境的研究」）の研究アプローチの独自性を再確認するに至った。なお、この論考において、五木寛之の『深夜の自画像』（創樹社、1974年）の中の「長い旅への始まり 外地引揚者の発想」に書かれた次の言葉に着目した。「アルジェリアの風土に対するカミュの入り組んだ感情が、私にはよくわかるような気がする。〈異邦人〉とは、単に観念上の問題ではなく、アルジェリアに生まれ育ったフランス人植民者が、国籍上の祖国に対する異和感と、生れ育った風土の土地からは拒絶されているという、宙ぶらりんの人間、引揚者としてのカミュの立場そのものではないか」（37頁）。カミュ、そして五木の「（旧）植民地で生まれ育った植民者」としての複雑な立場や心情を深く理解するためには、越境的かつ交叉的に読む比較文学研究、つまりは「越境的＝横領的読み」に基づいた比較文学研究をこれからも発展させる必要があるだろう。今後も、本研究（「カリブ海諸島及び朝鮮半島における（旧）植民者の文学に関する比較越境的研究」）の成果を活かして、「（旧）植民地で生まれ育った植民者」の比較文学研究を続けていく予定である。

<引用文献>

五木寛之「長い旅への始まり 外地引揚者の発想」『深夜の自画像』、創樹社、1974年
西成彦「日本語文学の越境的な読みに向けて」、立命館言語文化研究22巻4号、2013年1月

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 杉浦清文	4. 巻 43
2. 論文標題 継母語で書かれた帰郷ノート エドウィージ・ダンティカの『アフター・ザ・ダンス』を読む	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中京英文学	6. 最初と最後の頁 123-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 杉浦 清文	4. 巻 33(1)
2. 論文標題 植民者二世と朝鮮 森崎和江の詩におけるダイアログ、そして共振について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 79-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00015205	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 杉浦清文	4. 巻 No. 91
2. 論文標題 Wide Sargasso Seaを読むこと ハイチ系アメリカ作家Edwidge Danticatの場合	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 黒人研究	6. 最初と最後の頁 25-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 杉浦清文、西成彦	4. 巻 19
2. 論文標題 外国文学者の自国回帰をめぐる：英語圏文学者・比較文学者の杉浦清文さんに聞く	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 植民地文化研究	6. 最初と最後の頁 238-247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 杉浦清文
2. 発表標題 Edwidge DanticatのThe Dew Breaker (2004) を読む
3. 学会等名 日本アメリカ文学会中部支部
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 杉浦清文
2. 発表標題 ゾラ・ニール・ハーストンとエドウィージ・ダンティカにとってのゾンビ
3. 学会等名 立命館大学ヴァナキュラー文化研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 杉浦清文
2. 発表標題 Wide Sargasso Seaを読むこと ハイチ系アメリカ作家Edwidge Danticatの場合
3. 学会等名 黒人研究学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉浦清文
2. 発表標題 恐れずに創作すること / 書くこと <移民芸術家>Edwidge DanticatのThe Dew Breaker を読む
3. 学会等名 日本アメリカ文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉浦清文
2. 発表標題 故郷喪失者との対話 Jean Rhys による 1936 年の帰郷をめぐって
3. 学会等名 日本英文学会中部支部
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉浦清文
2. 発表標題 移民芸術家Edwidge Danticatにとっての「英語」使用
3. 学会等名 黒人研究学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉浦清文
2. 発表標題 少年時代の断片化された記憶 三木卓と『ほろびた国の旅』
3. 学会等名 日本比較文学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 伊勢芳夫、山本 起世子、マムヌール・ラハマン、呉 素汝、杉浦 清文、杉山 真央	4. 発行年 2021年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 424
3. 書名 「近代化」の反復と多様性 「東と西」の知の考古学的解体	

1. 著者名 中川 成美、西 成彦、アンドレ・ハイグ、金 東僊、杉浦 清文、劉 怡臻、吳 佩珍、栗山 雄佑、謝 惠貞、三須 祐介	4. 発行年 2022年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 352
3. 書名 旅する日本語 方法としての外地巡礼	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	西 成彦 (Nishi Masahiko)		
研究協力者	伊勢 芳夫 (Ise Yoshio)		
研究協力者	マックラウド ジョン (McLeod John)		
研究協力者	林 久博 (Hayashi Hisahiro)		
研究協力者	樹本 健 (Kimoto Takeshi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------